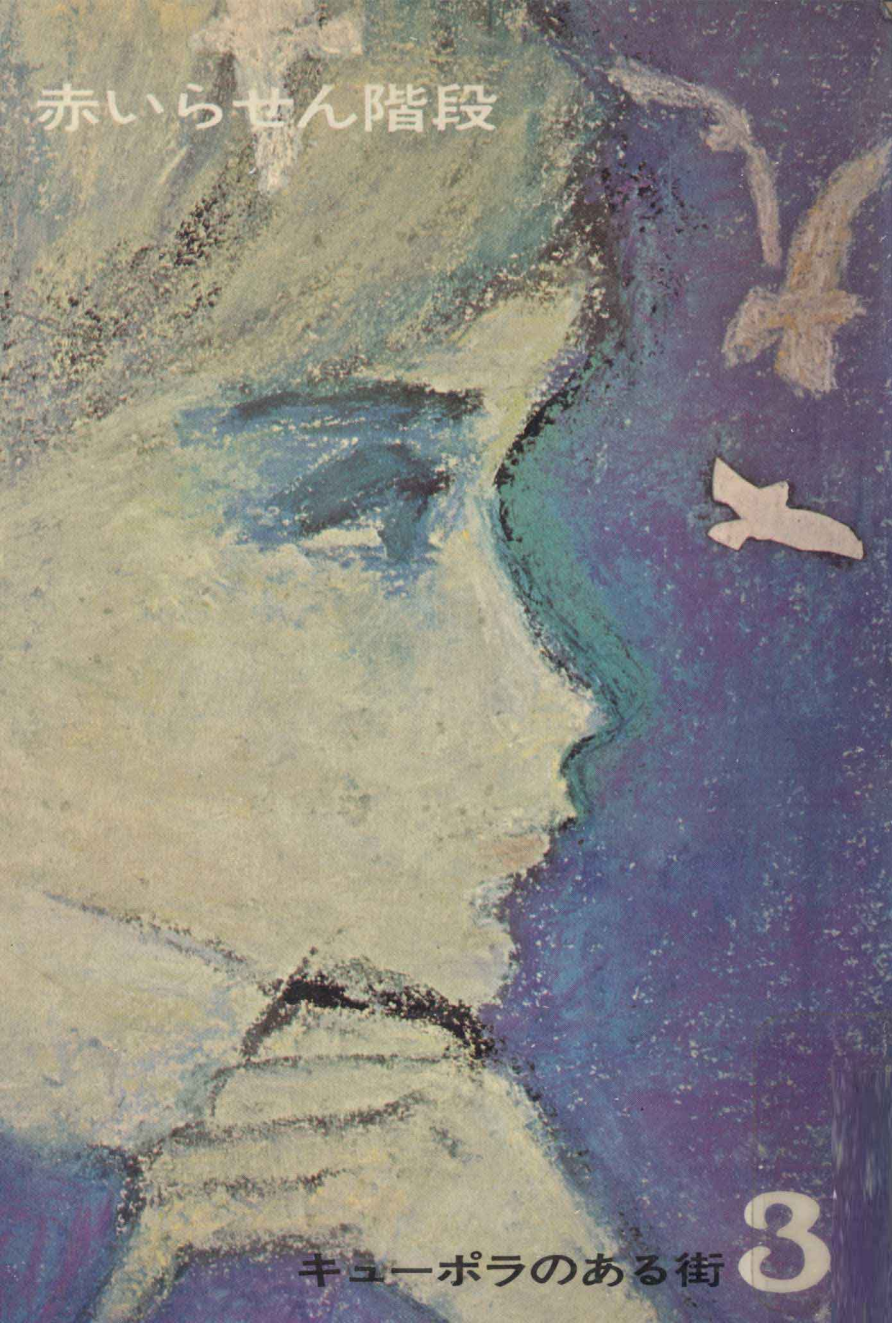

赤いらせん階段
キューポラのある街
3

ある街／第3部

赤いらせん階段

早船ちよ

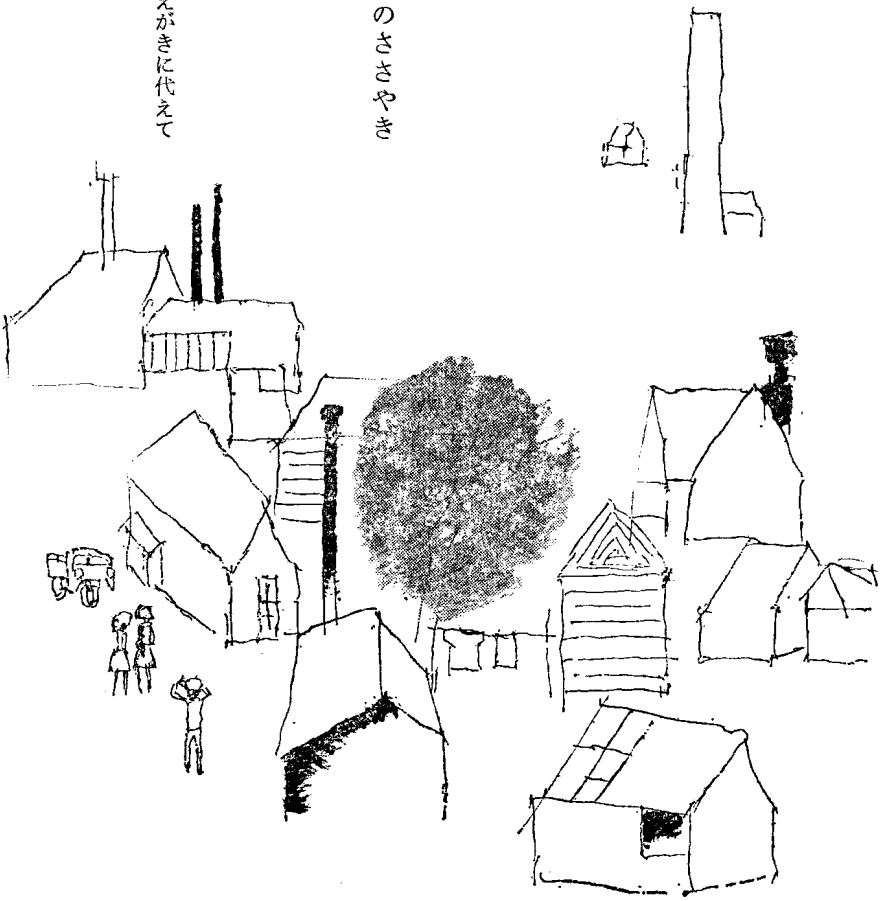
理論社刊

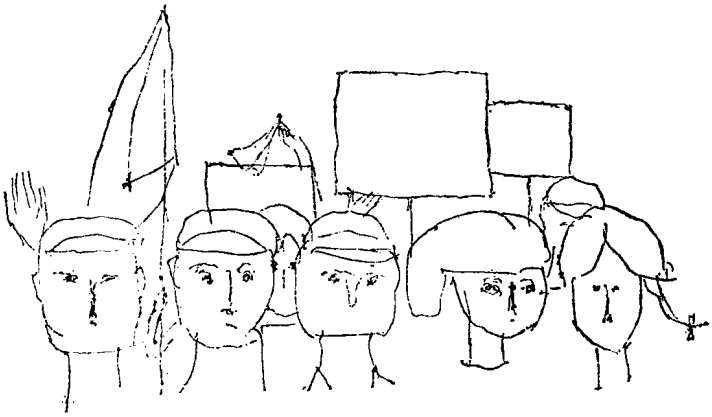
キューポラのある街（3）
赤いらせん階段

© 1967年8月　第1刷
定価　380円
作者　早船ちよ
発行者　小宮山量平
東京都千代田区神田神保町1の64
発行所　株式会社　理論社
電話東京（294）6501（編）
6504（営）
振替口座 東京 95736

未成年者は、
みよ、美しい虹を
読もう、ロマンスを
耳を傾けよう　風と陽のささやき
そして、
せいいっぱい歌おう
遊びの歌を——。

——まえがきに代えて





もくじ

1 抵抗期 5

2 レ・ミゼラブル 15

3 カギをなくす 20

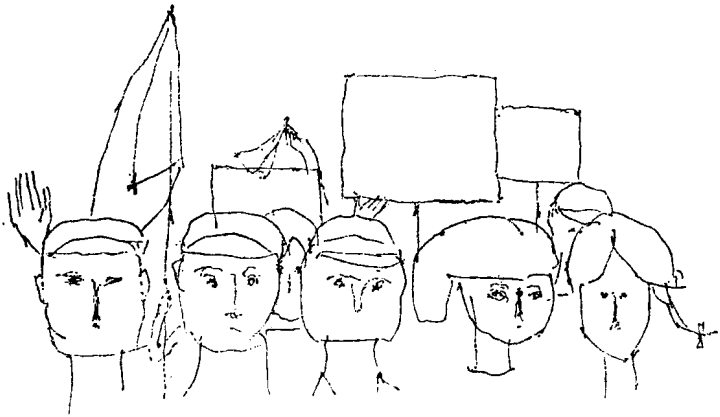
4 なぜ？ なぜ？ 34

5 チョウハツ論議 45

6 恋愛？——という生活感情 58

7 においの生理 76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook



8 ジュンの日記 98

9 根性があったら 104

10 よういならぬ時間と空間 120

11 花のわに加われ 143

12 高校生の集い 152

13 母たちの集い 174

14 母と娘 196

15 おごそかな儀式 214

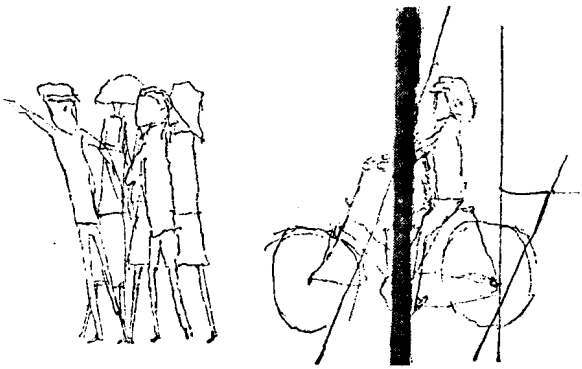
——よういならぬ時間と空間

あとがき・ジュンとノブ子と

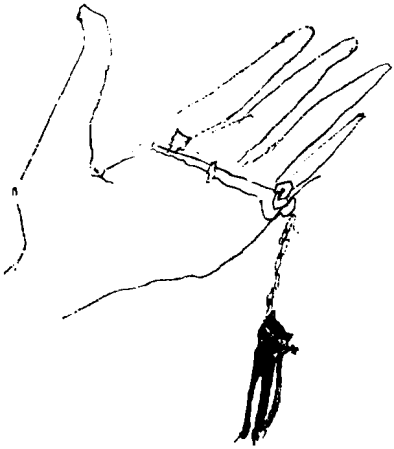
そのなかまの・あなたへ 233

そうてい／カット

鈴木　義治



1 抵抗期



それが、「赤いらせん階段」である。

津村ノブ子が下校して、家の門を入るなり、まっさきに目にしたもの。ゴシック風の木造二階建ての青く塗った壁と、あざやかな対照のまっ赤ならせん階段が、外庭からノブ子のへやの窓ぎわへそそり立っている。

――ノンコの、十七歳のたんじょう日には、すばらしいプレゼントをするよ。

まえまえから、父の津村裕哉が予告していたものだ。

ノブ子が玄関へとびこむよりも早く、内がわから、重たい鋳物枠のドアが開かれた。そこに、父と長兄の拓郎が待ちかまえたようすで立っていた。

「おかえり。できあがったよ、ノンコ！」

「おそいぞ、おそいぞ。もう、四時半すぎちゃったじゃないか、待たせやがって」

ノブ子は、拓郎には答えないで、父にむかって聞く。

「のぼってみてもいい？　パパ」

母の恵子が、白足袋で廊下をすべるようにやってくるなり、ぴしゃりと、たしなめる。
「ただいま――は、どうしました、ノブ子。そして、まず、パパにお礼を申しあげるものよ。十七歳にもなったら、ひとりまえのレディとして、パパやママにも、礼儀と節度を心得てほしいわ」
「はい、はい、ママ。ただいま帰りました。パパ、どうも、ありがとうございます」
すなおに、ノブ子は頭をさげる。
「ノンコ、ノンコ、おれへは、あいさつせんのか、『赤いらせん階段』の設計者のおれへは」
拓郎は、いばって腕組みをして、うそぶく。ノブ子は、ぺろり舌をだしてから、頭をさげる。
「兄き、かんしゃしてる」
「チエッ、けちなおじぎのしかただが、まあ、まけてやろう」
「パパ、のぼってくる。いい？」
「もちろん」
「わ！　うれし。わ！」
ぴょんと、ひとはねしたノブ子が、走っていこうとするのを、拓郎がよびとめた。
「ノンコ、あわてるな。――そうら、カギ」
拓郎が、ポケットからカギをとりだして、ぽいと投げる。キラキラ銀いろに光るそれを、ノブ子は両手をのばしてうけとめた。
ノブ子のへやは、大正初期の建築である津村邸二階建の西南隅――古風な暗い玄関に向かって左わきの泰郎兄のへやのま上にある。そこへいくにはこれまで、鋳物の唐草もようが浮彫りされてある玄関の、ずっしり重たいドアをあけて、どっしりした式台にあがり、ママのへや前の長廊下を、お手伝いさんべやと納戸の間までいって、よくふきこまれた木目のとおった階段をのぼる。それから長兄の拓郎のへやと、パパの書斉の前廊下を、しずかに歩いていかねばならなかったのだ。
だが、これからは。――外庭から直接、この赤いらせん階段をのぼって、じぶんのへやへ入ることができる！

「さきに、あがってけよ、おい」
拓郎が、うしろからうながす。
ノブ子は、赤いらせん階段の第一段へ、とんと足をふみかける。らせん階段は、垂直な金属のポールをめぐって、音階のように規則正しい間隔をおいて昇っていく。
とん、とんと、赤い踏み板が、靴底で鳴る。楽器のキーか、ふしぎな乗り物のペタルみたい。とん、とん、とん。七、八段、小きざみのペタルをのぼると、中心の円柱を一とめぐり。とん、とん……とん、とんとん……一気に、ひとめぐり、またひとめぐりすると、ノブ子のへやの窓ぎわ、赤いドアの前に立つ。
「パパ！　にいさん！　すばらしいわ。ママ、ママったら」
ノブ子は、下を見おろして叫ぶ。
「すばらしいわ、このプレゼント、パパ、最高よ」
「は、は、はは。それは、よかった」
津村裕哉は、五十歳には間があるつややかな顔を上機嫌に、にこにこさせている。――らせん階段のこのアイデアは、もともと、尾林組建設ＫＫの社長が目をつけていた。それを、拓郎の名前でアッコーデオン式らせん階段のパテント申請をしたら、さっそく、第一プレハブ住宅ＫＫから、権利をゆずってほしいと申しいれがきている。津村博士は、拓郎にも、よくいってきかせ、パテントがおりても、あわてて、安く手放すことはさせまいと思う。これは、高価な商品である。別荘やコッテージ、都市のプレハブ住宅のパネルに新しいイメージをもたせるアイデアとして、建築業界でも注目してるからだ。
カメラをかまえていた拓郎が、手であいずした。
「おりてこいよ、ノンコ。おりて、そのセーラー服を、たんじょう日のドレスに着がえしてこいよ」
「めんどうくさいな」
「色が冴えないんだよ。紺のセーラー服と、らせん階段の赤とでは」
ノブ子が、一気にかけおりてきた。

「ママのプレゼントのドレス、色は何です」
拓郎が、恵子に詰問するようにきく。
「白」
「ものは？」
「クレープ・ド・シーヌ」
恵子は、気どって、フランスふうに答える。
「よし、そんなら、くつは、赤のロー・ヒール。白いりぼんを髪に結んでみろ」
恵子が、母親らしくたしなめる。
「まあ、拓郎ったら、男の子のくせに、よけいなおせっかいよ」
「そうでもないさ、ママ。これからのおしゃれは、姿見のなかだけの色や線じゃ、いかさないんだよ」
「なんとかいって」
「よく聞けよ、ノンコ。風景や建物と、衣装の色のコントラスト考えたことあるか」
「あら、風景ですって」
「材質も考えるんだな。バックによって、絹か、レーヨンか。それとも、木綿をえらぶか」
「まあ！」
ノブ子は、キラキラした目で拓郎を見かえす。
——拓郎の目は、わたしの影に、いったい誰の姿を思い描いているんだろう……。拓郎は、ほんとうは誰に、おせっかいな助言をしているんだろう……。
ノブ子は、ひとり笑いしながら、母のへやへとびこんでいく。
紺の高校生の制服をぬいで、仕立てあがったばかりのドレスを着ると、せいの高い、均整のとれた十七歳は、レディに見える。フリルのついた、白いデシンのワンピースとジャスミンの香水は、ママのおくりものだ。赤いらせん階段を、ノブ子は、恵子の心づくしの装いで、ゆっくりとのぼっていく。
「似あうぞ、ノンコ。ドレスの純白と、らせん階段の赤と——」
拓郎が、カラー写真のシャッターをきると、すかさず、津村博士が命じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「よし、その角度で、アップで一枚！」
拓郎は、片ひざついて、アングルをたしかめながらいう。
「ノンコのバックは、風にけむるプラタナスだろ、その若緑いろに、ドレスの白も、らせん階段の赤も、じつによく、きいてるぞ」
うふふ、あはははは——と、こんどは、声をたてて笑った。ノブ子は、ジュンだったらどうだろうか、とおもう。
七、八段、小きざみな踏み板をのぼると、ごちゃごちゃたて込んだ工場街の、キューポラのあるトタン屋根がみえ、スモッグのなかに、ぽっかり、黒いガス・タンクが浮遊している。そのかげ、古びたバラックの聚落にジュンの二軒長屋もあるはずだった。しかし、庭にいる拓郎の目は、そこまで届かないのである。
——ライト・グリーンのよく似あう娘。はだかのすねをひからせて、風のようにふっとんでくるジュン。その彼女に似あうらせん階段を、拓郎はどんな色に塗りたがるだろう。緑の風景のどこかで、ライト・グリーンの似あう娘が長い髪の毛をなびかせてかくれんぼしてるような、突っ拍子もない唄声がひびいてくる季節だ。
——だが、おそらくいま。ジュンは、いまごろ一日の労働をおえて、工場の夕食もそこそこに、定時制高校へでかけようとしているだろう。工場は増産態勢で忙しいという。ここ半月あまり、工場の寮からかえってこない。手紙もよこさない。
——病気でなければいいが。
——勉強に首までつかりこんで、がりがり、がんばっているんだろう。少しは、あそんだほうがいいんだが。
さらに、四、五段のぼって見わたすと、荒川ど、と鉄橋、送電塔、ゴルフ・リンク。川には、ボートがでている。
また、二、三段のぼると、田園風景がひらける。田んぼの埋め立て地に、ピンク色の円形校舎がある。ノブ子の行っている県南第二高校である。

ぐるり、階段をまわって、いちばん上のおどり場に立つ。大空のはてをくぎって、すかっと青い山なみがつづく。

——あれは、オクタマから、チチブの山やまだろう。

「まあ、すてき！」

——山へ行きたいな、上信越か、遠くの山へ。

そんな気持の底では、父と兄の心づかい、愛情を、しみじみと感じているのだった。

赤いらせん階段は、インダストリアル・デザイン（工業デザイン）を志す拓郎のアイデアで、父と共同で設計した。工事は、父のつとめている尾林組建設ＫＫから、建設労働者が三人やってきて、半日かからぬうちに取りつけていった。

ノブ子は、赤いらせん階段のてっぺんで、思いきり大きく、息をすいこんだ。満十七歳の空気は、胸のすみずみまで、すがすがしく甘く、おいしい。

——視界を、広くもとう。

——風景も、人びとも、社会も、学問も、せまく区切ってみることをすまい。

——とくに、学問を。——テストなんかに追いたてられる学習なんて愚劣だ。

赤いらせん階段を、どこまでも、どこまでも、のぼっていって……大空へはばたいていくような、自由な夢をはぐくもう。

「パパ！　にいさん！　すばらしいわ、ノンコのへやは完全独立よ、ね」

赤いらせん階段の上から、ノブ子は歌うように、しゃべりつづける。

「わあ、うれし！　ママ、ママ、ノンコのプライバシー、一〇〇パーセントね」

ノブ子は、頬をほてらせ、声をたてて笑う。

「まあ、ノンコ。そんなこといって、外から強盗にでもはいられてごらんなさい。ぶ用心ったら、ありゃしない」

母の恵子は、娘らしく手足のすらりとのびたノブ子を細い眉をひそめて、見上げるのだった。

「そこは、ご心配無用。うまく設計してあるんだ

から。なあ、拓郎」
津村裕哉のことばに、拓郎はうなずいて、
「へやのカギ穴、見つかったか。ためしてみろよ。まだ、だれも、そのカギをつかってないんだよ」
銀色に光るカギは、くさりでつないであり、マスコットの黒猫が、かしこそうに目を光らせている。
らせん階段の上がり口には、階段の色とおそろいの赤いドアがとりつけてある。そのドアの錠へカギをまわそうとしたとき、ノブ子の手がすべった。カギが、ぽろっと、階段の踏み板へおち、ぴんと、はねかえって、下へとんだ。
「あらっ！」
と、ノブ子がさけんで、ぎくっとした。カギがおちたせいではない。赤い踏み台のすきまの下から、白い目が、いじわるく光って、仰いでいるのを見たからだ。その男は、やせて、ほお骨のとがった青黒い顔に無精ひげをはやし、あかじみたセーターを、だらしなく、ひっかけている。
——次兄の泰郎、と思いつくまでに、時間がかかった。彼は、拓郎の三つ年下で、去年二度めの大学受験をすべっている。
ノブ子は、兄というより、けものじみた男の卑しい視線で、からだを逆なでされる気がした。屈辱とショックで、くちびるの血まで、すうっと引いてしまう。
泰郎は、そんなノブ子へ不敵な冷笑を投げつけると、窓敷居へしりをかけて、でんぐり返しをして、じぶんのへやへはいりこんだ。あぶら汗でよごれた下駄だけが、窓下にのこった。
——十七歳っていえば、ノブ子、ひとりまえの女性だということを忘れないでね。たとい、家族でも、男性のまえで着替えなど、してはいけない——と、母の恵子は、娘とふたりだけのとき、ささやくようにいう。
——いいこと。階段をのぼるには、レディ・ファーストは、いけないの。降りるときは先でもかまわないけど。マナーって、慎みやたしなみもふ

くめて、だいじなものよ――
拓郎が、とんとん、とん、階段をかけのぼってきて、拾ってきたカギを、ノブ子にわたす。
へやのドアが、あく。
「いいかね、この押しボタンをこうして」
へやへ入ると拓郎は、ドアわきの柱にとりつけられた赤い押しボタンを、静かにおした。すると、らせん階段が、下の段から、手風琴のように、たたみあわされ、二階のドア入口まで、すうーっとあがってきた。小さなおもちゃのベランダのように、ドアの入口で、ぴたり、とまった。それはそのまま、雨にぬれないくつ脱ぎ箱の役もする。
拓郎は、小さなベランダから、庭の恵子を見おろして、とくいそうに笑う。
「ママ！　ママ！　強盗のやつだって、踏み板のないらせん階段なんて、のぼってこられないだろ、ね」
「とんでもない、のぼろうと思えばどこからでも……雨どいをつたってでものぼれます」
「ばからしい。いまどきそんな、めんどうな手続きをふむ花盗人なんかいるもんか」
「けさの新聞を見ましたか……高校生が、ゆうかいされたのを。その犯人は……」
「止して、ママ」
ノブ子は、顔をしかめる。こういうとき、恵子は「わたしたちとちがう労働者ふうの……」とか、「土建人夫らしい……」とか、いう。それがいやでならない。
「いいえ、こういうことは、はっきり知っておいていいことだと思いますよ。若い世代だってぐれた子がふえたというし……ノブ子、そろそろ、定時制の友だちとは、つきあわないほうがいいんじゃないかしら」
「ジュンのこと？」
「もうひとり、赤いスカートをはいてる子いるでしょう。ミニ・スカートっていうのかしら、短い、ももまで見えるようなスカートはいてる娘、あれでも、高校生なの」

「ああ、リス。リスでしょ。気がいいのよ、すごく」
「バーの娘さんだっていうじゃない」
「バーをしている母おやに反抗して、自立しているの、彼女。しんは、しっかりしてるのよ、弟思いだし」
「おつとめ？」
「喫茶店のアルバイト……学校には、ないしょで」
恵子は、ノブ子へ、けわしい視線をなげる。
「へんな友だちを、ママに無断でつれこんだりしては、承知しませんよ」
「はい、はい。へんでない子だけ、よびますよ」
ノブ子は、ドアを、ばたんとしめて、へやへとびこむ。
「ジュンをよべよ、まっさきに。……それから、リスといったかな、不良っぽい娘」
「ひがむわよ、おふくろ」
ノブ子は、肩をすくめる。
「さびしんだよ、彼女」

「ああら、なぜ」
「ひとり娘のノンコを、いつでも、そばにおいて、やいやい、世話やいていたいのにさ」
「ふふふふ……まさかね」
「いや、ふいうちに、こんなふうに独立されてさ、本心は、まいっているのだ。ママの古さなんだけどね」
「だって、ママ、まだ四十代でしょ」
「四十八歳と二か月。抵抗期だよ」
拓郎が、ぴしりといった。
「あら、抵抗期は、泰郎でしょう」
「ふん、あんなやつ」
拓部は、意地のわるい目を、階下の泰郎のへやへ向けた。
「なぜ、そんなふうに笑うの」
「あいつは、生れつきひねくれ屋なんだよ。性格的なものなんだ」
「そんなこと、ない。生れつき、ひねくれているなんて」

「そんなら、わがままで、甘いんだ」

ふだんはやさしい拓郎が、三つ年下の弟のことになると、冷酷なほど、かたくなになる。恵子も、父の裕哉さえも、泰郎には探るような冷たい目を向けずにはいない。それどころか、小学五年生の弟の三郎も、十六歳のお手伝いさんも、泰郎をバカにする。家族みんなの冷淡さにとりまかれて、泰郎が孤立しているのは、なぜか。

——大学受験を、二度すべった二浪のせいかもしれない——と、ノブ子はおもう。

——パパやママは、学生時代優秀な成績をつづけたという。拓郎は、そのパパやママの自慢の息子で、T工業大学の卒業をひかえ、工業デザイナーとしての将来を嘱望されているエリートだ。アメリカ留学の話もでている。

——二度も大学受験に落ちる泰郎は、もうそれだけで、けいべつされる人でなしでしかないのだ。

……わたしも。

ノブ子は、不安な目になる。高校三年生のノブ子を、ガチガチ受験勉強させるため、ママは、「赤いらせん階段」のおくりものを、最大限がまんしているところだろう。

ノブ子のへやの階下は、泰郎のへやである。二階と、階下に受験生がひとりずつ。階下では、泰郎が、母のへやの真向かいの六畳に、いつも監視される形でくすぶっている。

——泰郎は、わたしのしあわせをねたんで、なおさら、意固地になっているんだわ。

——かわいそうな泰郎！……でも、わたしのこの部屋が泰郎のもので、玄関わきがわたしの場所だったら……。

——いや、いや。泰郎がよこせといったって、とりかえてなんかあげない。

——わたしは、泰郎じゃないもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook